

京都大学埋蔵文化財研究センターでは、総合人間学部構内において、2001年10月から、全学共通教育棟新営工事にともなう発掘調査を、2300m²あまりの範囲で実施してきた。現在、古代の遺物包含層である黒褐色土層の掘り下げと遺構の確認を実施中だが、その過程で、近畿地方では初の出土確認例となる九州型の青銅製経筒が、石室状の施設に納められた状態でみつき、ここに経塚があったことが判明した。経筒が非常に貴重な例であるばかりでなく、山麓などに多い経塚が発掘調査で出土することも珍しいことから、その出土状態をひろく公開することとした。これまでに調査が終了している中世の遺構とあわせて紹介する。

経筒・経塚について 今回出土の経筒は、九州地域に特有の分布圏をもつ「九州型経筒」のなかでも、青銅製の円筒を積み重ねる構造の「積上式経筒」と呼ばれるものになる。積上式は、二段から四段まであり、四段例が最も多く規格性も高いほか、1136年～1152年の紀年銘が知られている。九州以外では、山口県と岡山県で各一例ずつ報告されているのみである。

今回出土例は、長さ6cm直径10cm程度の筒身が重なる状態で出土していること、段をもつ台座や笠型の蓋の形状からみて、四段積上式であった蓋然性が高い。よって、年代はほぼ12世紀中葉に比定される。厚さ1mm内外の精巧な作りであるが、残念ながら蓋の一部が欠失し、頂部の相輪鈕（相輪形をつまみ）も見つかっていない。筒身部も相当破損しているが、回収済みの破片が多数あり、経片とみられる紙の断片も認められる。経筒のほかには、付属飾金具の一部2点、淡緑色の小玉（材質不明）2点がある。筒身への刻字などは未確認である。

経筒の下には、厚さ5cmほどの平板な石があり、東側を2個の石で囲んでいることから、埋納のための石室状施設があったことがわかる。ただし西側は大学の管路で破壊され、上面も、経筒のみでも本来は30cm以上の高さになるはずであるから、のちにかなり削平されたとみられる。蓋と筒身の位置関係や遺存状態からも、そうした後世の破壊をうかがうことができるが、むしろこれだけの悪条件下でよくここまで残ったといえる。なお、東隣にごく小さな方形の配石があり、関連施設の可能性もあるが、内部から出土品は無く性格不明である。

経塚の築かれた場所は、東西方向の溝状遺構上面にあたり、周囲は、11世紀代の土器を交えながら10世紀代の瓦がかたまっている状態にある。したがって現状では、この経塚は、11世紀に瓦などが投棄集積した地点に、12世紀に形成されたものと理解している。また今回の調査区内では、経塚と同時期とみられる関連遺構は特定できていないが、瓦類は多数出土をみている。平安時代の調査区一帯については、少ない情報から、吉田社、吉田寺、福勝院などさまざまな可能性が指摘されているものの、決め手となるものはない。今後出土遺物の検討も進める中で詳しく検討していきたい。

今回、このように近畿地方ではじめて九州型の経筒が出土したことは、当時の祭祀や宗教にかかわる集団が、広域での交流網を有していたことを裏付ける具体的証左として非常に意義深い。とりわけ、いまだ造営の組織や性格に不明な点が多く残されている経塚に関して、九州と近畿は造営作法に至るまで異なる排他的な2大中心地といえるが、そこに接点が生じたことになる。今後理解をめぐって多くの議論が生じよう。

その他の遺構について 中世の遺構としては、溝、石室、柱穴列などがある。とくに、東西方向にはしる濠状の大溝SD106 a・bは、中世を通じて複数回掘削されており、東側の1995年度調査区での成果を勘案すると、居館周囲の方形区画であった可能性がある。SD51やSA1～SA4は、この内部の区画や建物跡の遺構であったとみられ、この一帯からは中世の瓦が大量に出土している。

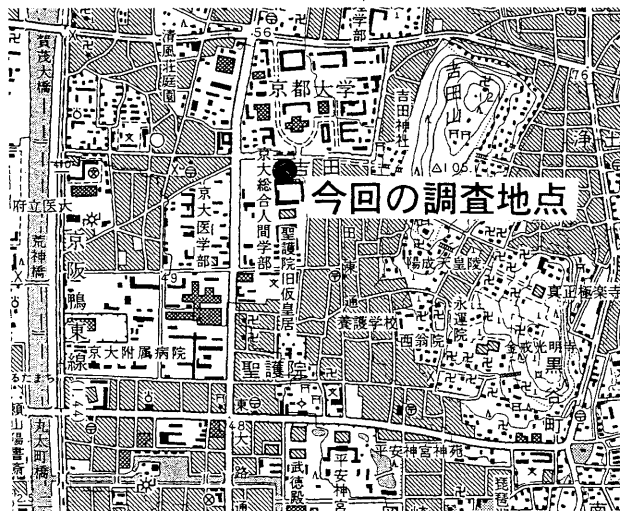


図1 今回の調査地点

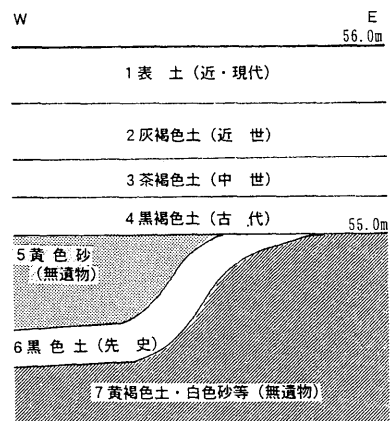
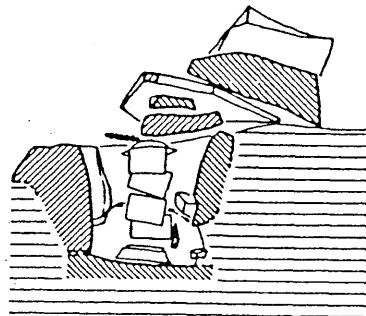


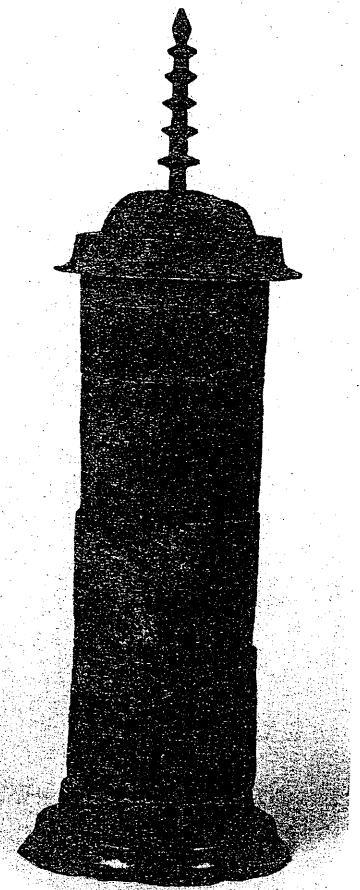
図2 調査区の基本層序模式図(縮尺 1/40)

経塚 経を写した仏教教典を地中に埋納した遺跡。藤原道長が1007年(寛弘4)に造立した金峯山 経塚は既知最古の例である。古くは銅製あるいは陶磁製や滑石製の経筒・経箱に写経を納め、さらに陶磁製の外容器で覆って地中の小石室や土壌中に埋める。これに副えて銅鏡・鉄小刀・合子・貨幣・仏像・仏具を埋納する例もある。地表には小規模な盛土をする場合が多く、平安後期の京都鞍馬寺経塚では、標識として石塔を建てていた。経塚の起源には諸説があるが、末法の世に経典が消滅することを恐れ、弥勒出世の日までこれを保存するために築いたもので、円仁が入唐帰朝に際しこの風習を伝えたという。経典保存のために瓦経・銅板経・滑石経などの不朽の材を用いた例もある。鎌倉・室町時代以降には、経塚造立も現世利益祈願や供養を目的とする場合が多くなり、柿経・一字一石経(礫石経)・貝殻経などの1片に1字1行を写経する例も現れる。(上原真人)

新編日本史辞典(東京創元社、1990)より



▲ 福岡県英彦山南岳経塚の遺物出土状態(平安時代<12世紀>)。石室を構築し4段積上式の経筒を埋納している。上図は、英彦山南岳経塚の遺構実測図(「英彦山修験道遺跡」1985より)。



▶ 銅製積上式経筒(英彦山南岳経塚出土 平安時代<12世紀> 総高37.9cm 添田町教育委員会)。四段積上式の銅製経筒。これまでに積上式は四十数列ほどが確認されているが、四段に積み上げた例がもっとも多く三段の例は少ない。

図3 四段積上式経筒の参考資料

(関秀夫『日本の美術No.292 経塚とその遺物』至文堂、1990より)

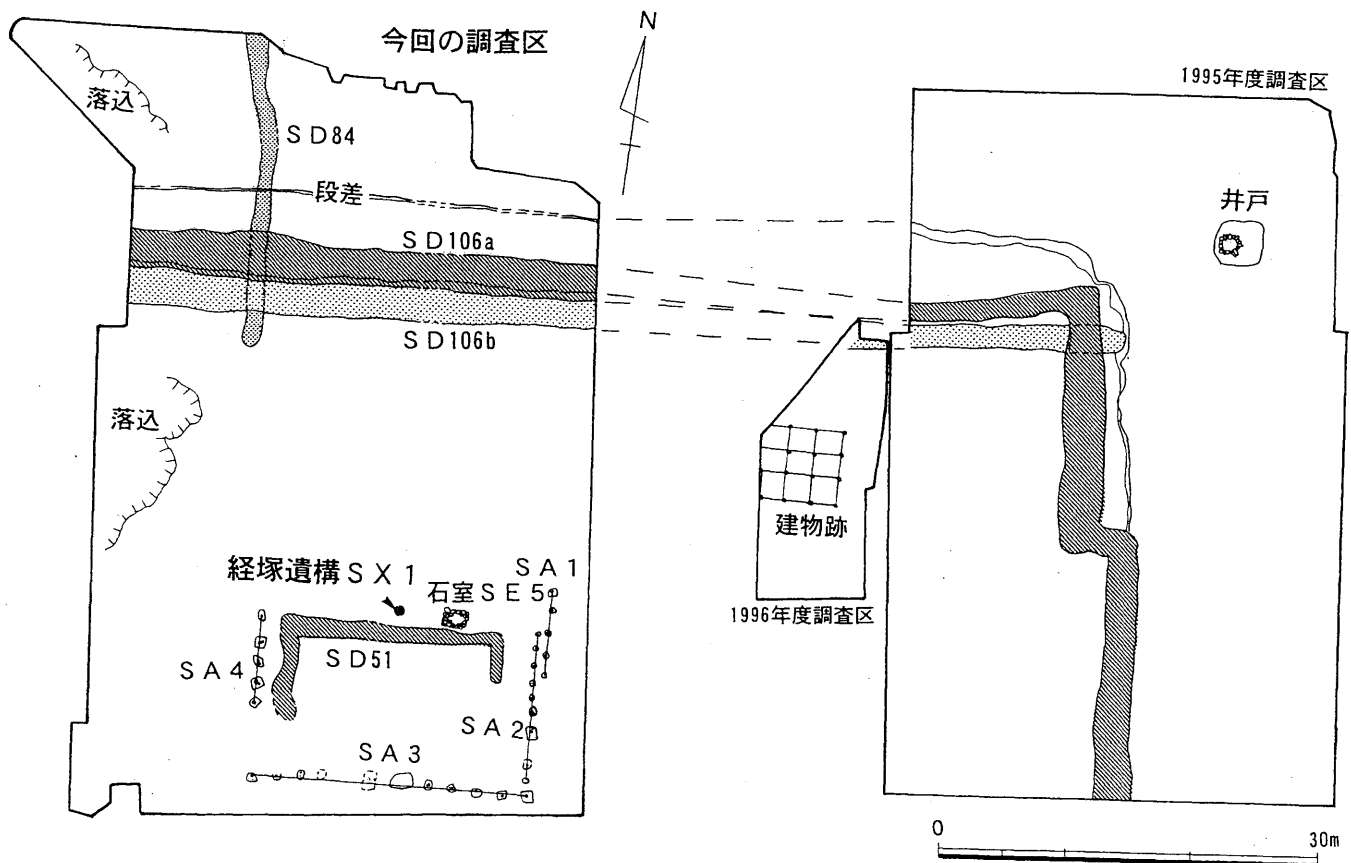


図4 主要な遺構配置図(縮尺 1/600)